

負傷した線路と月

小川未明

青空文庫

レールが、町^{まち}から村^{むら}へ、村^{むら}から平原^{へいげん}へ、そして、山^{やま}の間^{あいだ}へと走^{はし}っていました。

そこは、町^{まち}をはなれてから、幾^{いく}十マイルとなくきたところでした。ある日^ひのこと、汽^き車^{しゃ}が重^{おも}い荷^{にもつ}物^{もの}や、た^たくさんな人^{にん}間^{げん}を乗^のせて過^すぎていきましたときに、レールのある部^ぶ分^{ぶん}に傷^{きず}がついたのであります。

レールは、痛^{いた}みに堪^たえられませんでした。そして泣^ないていました。自分^{じぶん}ほど、不^ふ運^{うん}なものがあるだろうか。毎^{まい}日^{にち}、毎^{まい}日^{にち}、幾^{いく}たびとなしに、重^{おも}い汽^き罐^{かん}車^{しゃ}に頭^{あたま}の上^{うへ}を踏^ふまれなければならぬ。汽^き罐^{かん}車^{しゃ}は、それをば平^{へい}氣^きに思^{おも}っている。そればかりでなく、太^{たい}陽^{よう}が、身^みを焼^やくほど、強^{つよ}く照^てらしつける。日^ひ蔭^{かげ}にはいろうとあせつても自^じ由^{ゆう}に動^{うご}くことができな^い。太^{ふと}い釘^{くぎ}が自分^{じぶん}の体^{からだ}をま^まくら木^ぎにしつかりと打^うちつけている。考^{かん}えてみると、いつたい自分^{じぶん}の体^{からだ}というものはどうなるのであろうか……と、レールは、思^{おも}って泣^ないていました。「どうなさったのですか？」と、そばに咲^さいていた、うす紅^{べに}色^{いろ}をしたなでしこの花^{はな}が、はじらうように頭^{あたま}をかしげてたずねました。

いつも、この花^{はな}は、なぐさめてくれるのであります。こういわれて、レールはうれしく思^{おも}いました。

「いえ、さつき、汽罐車^{きかんしゃ}が、傷^{きず}をつけていったのです。たいした傷^{きず}ではありませんけれども、私は、身^みの上^{うへ}を考^{かんが}えてつくづく悲^{かな}しくなりました。それで泣^ないていたのです。」と、レールは、答^{こた}えました。

「まあ、そうでしたか……。あなたのような、強^{つよ}い方^{かた}がお泣^なきなさるのは、よくよくのことでございましょう。私^{わたし}どもだったら、どうなってしまったかしれない。そういえば、さつきたくさんの材^{ざい}木^{もく}と、米^{こめ}だわらと、石炭^{せきたん}と、なにかの箱^{はこ}を、いっぱい貨車^{かしや}に積^つんでいきました。そして、今日^{きょう}は客車^{きやくしゃ}もいつもより長^{なが}かったようでした。山^{やま}のあちらには、海^{うみ}があり、また、温泉^{おんせん}などもありますから、そこへいく人^{ひと}たちでにぎわっていたでしょう。それにしても、あなたの傷^{きず}が、たいしたことがありませんで、ようございしましたこと。」と、花^{はな}は、しんせつにいいました。

レールは、きらきらと光^{ひか}る顔^{かお}を花^{はな}の方^{ほう}に向けて、

「やさしいあなたが、私^{わたし}をなぐさめてくださるので、どれほど、私^{わたし}は、うれしく思^{おも}っているでしょう。あなたが、すぐ近^{ちか}くで咲^さかない時分^{じぶん}はどんなに、私^{わたし}は、さびしかったでしょう……。」と、日^ひごろは、いたって強^{つよ}く黙^{だま}っていて、辛抱^{しんぼう}しているレールは、つい涙^{なみだ}ぐましい氣持^{きも}ちになりました。

すると、うす紅色べにいろをした花は、いいました。

「しかし、私の命わたしのちもそう長くはありません。このあつきで、私の体わたしからだは、弱よわっています。長ながいこと雨が降あめふらないのですもの。」と、歎なげいたのでした。

このとき、風かぜが、レールの上うえをかすめて、花はなを揺ゆすっていったのであります。

レールは、耳みみをすましながら、

「夕立ゆうだちがやってきそうですよ。遠方えんぽうで雷かみなりが鳴なっています。それは、あなたの耳みみには、

はいりますまい。ずっと遠とほくでありますから。けれど私わたしどもは、こうして長ながく、つづいていますので、その音おとが伝つたわって聞きこえてくるのです。」といいました。

花はなは風かぜに吹ふかれながら、

「ほんとうでしょうか。そうであれば、どれほど私わたしはうれしいかしれません。」と答こたえました。

このとき、花はなを吹ふいている風かぜが良かったです。

「ほんとうですよ。今日は、こちらも降ふるでしょう。もうすこしたつと、雲くもがぐんぐん押お寄よせてきて、あの太陽たいようの光ひかりを隠かくしてしまいますから。」と、知しらしてくれました。

レールは、熱あつくなつた体からだを、早はやく水みずに浴あびて冷さましたいと思おもいました。また、花はなは、早はやく、

水を吸^{みず}つて死^しにそうな渴^{かわ}きをば、いやしたいと思^{おも}いました。

しばらくすると、はたして、黒^{くろ}い雲^{くも}や、灰^{はい}色^{いろ}の雲^{くも}がぐんぐんとあちらから押^おし寄^よせてまいりました。そして、青^{あお}々^{あお}としていた空^{そら}をしだいに征^{せい}服^{ふく}して、いつしか太^{たい}陽^{よう}の光^{ひかり}すら、まったくさえぎってしまったのです。

焼^やけるように、赤^{あか}くいろどられていた野^のは、急^{きゅう}に涼^{すず}しく、うす暗^{ぐら}くかげったのでした。その時^じ分^{ぶん}から雷^{かみなり}の音^{おと}は、だんだん大^{おお}きく近^{ちか}づいてきたのでした。

レールも花^{はな}も、声^{こえ}をたてずに、ものすごくなつた空^{そら}の模^も様^{よう}をながめていました。雨^{あめ}がとう降^ふつてきたのであります。雨^{あめ}は花^{はな}に降^ふりそそぎました。また、レールの上^{うへ}に降^ふりかかりました。そしてレールの熱^{あつ}くなつた体^{からだ}を冷^ひやして、その傷^{きず}痕^{あと}を洗^{あら}つてやりながら、

「まあ、かわいそうに……。」と、雨^{あめ}はいいました。

レールは、涙^{なみだ}ぐみながら、雨^{あめ}に向^むかつて、今日^{きょう}、冷^{れい}酷^{こく}な汽^き罐^{かん}車^{しゃ}に傷^{きず}つけられたこと、太^{たい}陽^{よう}が、これまでというものは、毎^{まい}日^{にち}、毎^{まい}日^{にち}、用^{よう}捨^{しや}なく、頭^{あたま}から照^てりつけたことなどを話^{はな}しました。すると雨^{あめ}は、こういいました。

「それは、お氣^きの毒^{どく}なことです。私^{わたし}はあつくなつていたあなたの体^{からだ}をひやしてあげました。私^{わたし}たちはもうじきにここを去^さらなければなりません。その後^{あと}にはきつと月^{つき}がで^ででありま

しよう。月は、太陽とはまったく気性がちがっています。そして、万物の運命をつかさどる力は、いまそ太陽のようになくても、昔は、えらかったものだそうです。そのことを月に向かつてお話しなさい。月は、あなたが訴えなされたら、けつして悪いように取りはからいはいしなかうと思ひます……。」と、雨は静かな調子でさとしてくれました。

はたしてほどなく雲が去り、そして降っていた雨は晴れてしまいました。あとには、すがすがしい夕空が青々と水のたたえられたように澄んで見えました。

その夜、平原を照らした月は、いつも見る月よりは清らかで、その光のうちには、慈悲の輝きを含んでいました。やさしい花は、雨にぬれたままだれて、早くから眠ってしまい、そしてその葉蔭のあたりから、虫の泣く声が流れていました。

去っていった雨は月にささやいてでもいったものか、月が、この平原を照らしたときは、まずレールの上に、その姿を映しました。レールは、月に向かつて、今日、自分を傷つけていった汽罐車があつたことを告げたのであります。

「どんな汽罐車であるかしのれないけれど、そんなことをしてしらぬ顔をしているとは冷酷な汽罐車である。私がいつて不心得をさとしてやるから、もし見覚えがあつたら

聞かしなさい。」と、月はいいました。

レールは、汽罐車の番号を教えました。

月は、さつそく、町から村へ、村から山の間へというふうに、力のおよぶかぎり、レールの告げた汽罐車をさがして歩いたのです。ちょうどその時分、鉄橋の上を走っている汽車がありました。月はその汽罐車ではないかと飛び下りてみましたが、番号がちがつていました。

月は海岸という海岸、野原という野原をさがしてまわりました。そして、いたるところに汽車が走っているのを認めました。貨車ばかりのもあれば、また客車に貨車がまじっていたのもありました。海岸では海水浴をしている人間もありました。彼らは、「ほんとうに、いい月夜だこと。」といって、砂浜でねころんだり、また暗い波の中を泳いだりしていました。客車の窓からは、人々が頭を出して、海の景色をながめながら、笑ったり、話したりしていました。

しかし、この汽車の汽罐車も、月のたずねている番号ではありませんでした。こうしてほとんど同じ時刻に、地上をたくさんの汽車が走っていましたが、レールのいった汽罐車は、トンネルの中へでもはいつていたものか、つい月の目にとまりませんでした。

涼しい一夜を送つて、レールは、もはや、昨日の苦痛を忘れてしまいましたけれど、約束をした月は翌日の夜も、レールを傷つけた汽罐車を探してまわったのでした。すると、ある停車場の構内に、ここからは、遠くへだたっている平原の中のレールから聞いた番号の汽罐車がじつとして休んでいました。

月は、さつそく、汽罐車の上へたどりつきました。そして、いつものように、静かな調子で、

「どうして、そんなに、沈んで、じつとしているのだ。」といて、たずねました。

汽罐車は、月に、こういつて話しかけられると、はじめて、口を開きました。

「私はどんなに、疲れているかしれません。毎日、毎日、遠い道を走らせられるのです。そして昨日は、いままでもない重い荷をつけさせられていたので、一つの車輪を痛めてしまいました。私は、あの重い荷物と車室の中で、そんなことには無頓着に、笑ったり、話したりしていた人間が、憎らしくてしかたがありません……。」と訴えたのであります。

「そんなら、おまえも、体をいためたのか？」と、月は問いました。

「そうです。どこかでレールとすれ合つて、一つの車輪を傷つけました。」と、汽罐

車は答えました。

月は、それを聞くと、だれが悪いということができなかった。そして、レールを傷つけたといって汽罐車をしかることもできなかったのであります。

「その荷物は、どこまで載せていったんですか。」と、さらに月はききました。

「どこといつて一ところではありませんでした。大きな箱は、港の駅までつけていき、また石炭や木材は、ほかの町で降ろしました。」と、汽罐車はいいました。

「どうぞ、お大事に……。」と、いつて、月はこんどは、港の方へまわったのであります。すると、いま、汽船が煙をはいて出ようとしていました。その船には、大きな箱がいくつも載せられてありました。月は、さつそく、船の上へやってきて、箱を照らしたのであります。

「これからどこへいくのですか。」と、月はたずねました。箱は、黙つて、物思いに沈んでいましたが、

「私たちは、どこへやられるのかわかりません。故郷を出てから、長い間汽車に載せられました。そして、いまこの広々とした海の上をあてもなく漂っているのをみると心細くなるのであります。」と、箱は答えたのです。

月は、そこで、いつたいだれが悪いのかと考^{かん}えました。そこで、こんどは、人^{にん}間^{げん}のよ
うすを見^みとどけようと思^{おも}いました。そして、街^{まち}へ降^おりて、あたりを見^みまわしましたが、も
うだいぶんおそかったとみえて、みんな窓^{まど}がしまっていました。一軒^{けん}、二階^{かい}の窓^{まど}がガラス
戸^どになっっているのがありましたので、月^{つき}はそれからのぞきました。すると、そこには、か
わいらしい赤^{あか}ん坊^{ぼう}がちようど目^めをさまして、月^{つき}を見^みて喜^{よろこ}んで、笑^{わら}っていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

初出：「赤い鳥」

1925（大正14）年10月

※表題は底本では、「負傷《ふしょう》した線路《せんろ》と月《つき》」となっていて
ます。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

負傷した線路と月

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>